の志、洵に此の如き者あり、

天祥獄中にあり、日に文墨を以て自ら樂しみ、亦其の他を知らざるものゝ如し、隨て觸れ隨て感じ、隨て吟し隨て草し、手から其の詩を編み、此の歳既に五卷を爲れり、皆自ら其の平生の行事を譜す、一卷は杜子美の五言句を集めて、絶句となすこと二百首、且之れが叙を爲くる、集杜詩是れなり、其の詩五羊より金陵に至るを一卷となし、吳門より臨安に歸り、淮に走り、閩に至る詩、凡三卷併せて四卷、之を指南錄と號す、集杜詩二卷と併せて詩五卷あり、

此の夏之を弟璧と孫氏妹とに付して歸らしむ、弟璧は昨年夏五月を以て燕に至り入覲せしもの、彼れ文氏宗祀の責に任ずるが故に、此の如し、故に天祥が陞子に付したる書に曰く、

汝生父與汝叔、姑全身以全宗祀、惟忠惟孝、各行其志矣、

惟忠即ち是れ天祥の責、惟孝即ち是れ弟璧弟璋の責なり、故に璧は惠州よりして入覲せしなり、孫氏妹も亦嘗つて執へられて燕に在り、今や弟璧と孫氏妹とは、共に南に歸らむとするなり、天祥乃ち附するに其の詩卷を以てし、且其の髮を剪して之に寄せ以て永訣となせり、其の弟に與ふる書に曰く、

潭廬之西坑、有一地、已印元、渭陽所獻、月形下角、穴第淺露、非其正、其右山上有穴、可買、以藏我、如骨不可歸、招魂以封之、陞子嗣續、吾死奚憾、女弟一家流落在此、可爲悲痛、吾弟同氣取之、名正言順、宜極力出之、自廣達建康、日與中甫鄧先生居、具知心事、吾銘當以屬之、若時未可出、則姑藏之、將來文山宜作一寺我廟於其中、

渭陽か元に獻せしの地、其の正にあらず、其の右山上の一地買うて以て我を埋むへし、もし骨を以て歸り埋むるを得すむは、我一掬の髮を以て之に封し、以て我か魂を招け、我墓碑の銘は、宜しく舊禮部郎官鄧光薦に屬すへし、光薦は所謂中甫鄧先生是れなり、中甫は嘗て天祥と共に廣州より北に送られたるの人、天祥之と俱に建康に抵り、こゝに中甫は天慶觀に寓せしめられて、黃冠道服の客となり、天祥は之と相別れて檻車迢々燕山に入りしなり、陞子は天祥の嗣子たり、既に嗣子あり、天祥の祀絶ゆることなし、天祥以て安して死すへし、天祥の廟は、宜しく之を文山に建つべし、文山は天祥か舊と棲遲せるの山、天祥の心は陞に於て切なり、天祥の魂は文山泉石の間を遊る、故に其の與方伯公に與ふる書に曰く、

天祥百拜、覆梅溪尊舅、舅天祥爲子不孝、老母已矣、每誦如母存焉之詩、今惟此一舅矣、每一南望、未嘗不爲之潸然也、天祥自國難以來、間關兵革、鞠躬盡力、百折而不悔、以致

家國俱斃、爲之何哉、當倉皇時、仰藥不劑、以致身落人手、死生竟不自由、及至朔廷抗辭、奉節、留連幽囚、曠閱年歲、孟氏云、天壽不貳、修身以俟之、如此而已矣、老母年方望七、賓殯餘慼、然生榮死哀、粗慰人子之情、以此故、應刀鋸在前、亦含笑入地矣、不肖固不能躬、畢大事、天地鬼神、諒昭鑒之、母喪歸葬、已戒仲氏、八哥來復、審尊候萬福、仰惟德人動厲、神物護持、優游餘年、萬萬珍重、兒子道生、不幸夭折、今立陞姪爲子、凡百惟舅公教之誨之、是望、區區拆骨、已分溝壑、當具衣冠、殮於文山之陽、疇昔舅所指之處也、并哀而望之、謹奉書、永訣萬古萬古、

「區區拆骨、已分溝壑、當具衣冠、殮於文山之陽、疇昔舅所指之處也」と曰ふ、天祥が如何に文山の麓に情緒纏綿たるものあるかを見るに於て餘あるべし、今立陞姪爲子、凡百惟舅公教之誨之、是望」と曰ふ、天祥が如何に陞子に心を注ぐものありしの一班を知るに難からず、要するに文山と陞と、是れ即今獄中に於ける、天祥が思念の燒點たるなり、中心たるなり、

節は早や端午の節とはなりぬ、天祥は獄中に此の節を再び迎はさるを得ず、

五月五日午、贈我一枝艾、故人不可見、新知萬里外、丹心照夙昔、鬢髮日已改、我欲從靈均、三湘隔遼海、

昔靈均懷沙の賦を作りて、汨羅に投せり、湘水の流は、千古萬古、怨を帶ひて長し、天祥北の方燕獄に投せらる、江南を隔る千里萬里、恨らくは靈均に從うて、青虬に騎り、白螭を驅り、蘭を攬し、菊を采りて、八區に周游し、九埃に優容する能はざるを、已ぬるかな、江南の菖蒲は、嘗て靈均か攬りて以て佩ひたる所、北燕天祥其れ何を攬り、何を佩ひて、何の處に周游し、何の邊に優容せむ、天祥は依然として獄中に在り、

五日も過ぎて、十七日夜、大雨滂沱として盆を覆へすか如し、大雨歌を作くる、

去年五月望、流水滿一房、今年後三夕、大雨復沒床、我辭江海來、中原路茫茫、舟楫不復見、車馬馳康莊、矧居圜土中、得水猶得漿、忽如避巨浸、倉卒殊徬徨、明星尚未啓、大風方發狂、四呼人不聞、宛轉水中央、壁下有水穴、羣鼠走踉蹌、或如魚潑刺、整溺無所藏、周身莫如物、患至不得防、業爲世間人、何處逃禍殃、朝來闢溝道、宛如決陂塘、盡室泥濘塗、化爲糜爛場、炎蒸迫其上、臭腐薰其傍、惡氣所侵薄、疫癘何可當、楚囚欲何之、寢食此一方、羈棲無復望、坐待仆且僵、乾坤莽空濶、何爲此凉凉、達人識義命、此事關綱常、萬物方焦枯、皇皇禱穹蒼、上帝實好生、夜半下龍章、但願天下人、家家足稻粱、我命渾小事、我死庸何傷、

大雨橫さまに屋を壓して、霖淫床を沒す、土圜の中濁水充滿し、天未た全く明けすし

て臥榻亦水に浸す、驚き惶れて人を呼へとも答ふる人もなし、身は泥水に沒せられて、四壁の群鼠皆溺死す、雨後泥濘室に盈ち、糜爛を極め、日光射り來つて、炎蒸又甚しく、臭氣惡薫人爲めに昏倒し、眩倒せむとす、天祥此の間に在り、猶曰ふ「但願天下人家家足稻粱」と、天下の憂に先して憂ふる者、

七月二日又大雨、天祥復歌を作くる、

燕山五六月、氣候苦不常、積陰餘五旬、畏景淡無光、天漏比西極、地濕等南方、今何苦常雨、昔何苦常暘、七月二日夜、天工爲誰忙、浮雲黑如墨、飄風怒如狂、滂沱至夜半、天地爲低昂、勢如蛟龍出、平陸俄壞襄、初疑倒巫峽、又似翻瀟湘、千門各已閉、仰視天茫茫、但聞屋側聲、人力無支當、嗟哉此圖土、占勝非高岡、赭衣無容足、南房并北房、北房水二尺、衆立唯東廂、桎梏猶自可、凜然覆窮墻、嘈嘈復雜雜、烝汗流成漿、張目以待旦、沉沉漏何長、南冠者爲誰、獨居沮洳場、此夕水彌滿、浮動八尺床、壁老如欲壓、守者殊皇皇、我方鼾鼻睡、逍遙遊帝鄉、百年一大夢、所歷昏黃粱、死生已勘破、身世如遺忘、雞鳴叫東白、漸聞語聲揚、論言若飄蕩、形勢猶倉皇、起來立泥塗、一笑褰衣裳、遺書宛在架、吾道終未亡、

天祥兵馬司に囚せられて、將さに三年ならむとす、此の間方さに盛夏の時に當り、此の如きの陰霖、天祥苦悶亦一詩を書す、

陰陽相烹煎、天地一釜瀾、人生居其間、便同肉在砧、熱猶以火燎、濕猶以湯淫、一歲一煆煉、老形忽鬢鬢、吾生四十六、弱質本不任、矧當五六年、患難來侵尋、子卿慙羊節、少陵杜鵑心、酷罰毒我膚、深憂煩我襟、嗟嗟夏涉秋、天道何其淫、或時日杲杲、或時雨淋淋、方如坐烝甑、又似立烘煁、水火交相禪、釜熱與釜深、宛轉兒戲中、日夜空呻吟、何如眞鼎鑊、殊我一寸金、脫此寒暑殼、誰能復嶇嶔、

大雨の後兵馬司の墻壁頹落して、地皆沮洳、囚人も之に居くべからず、因て其の五日を以て司を官籍監に移す、天祥其の詰朝を以て、官籍監に移さる、天祥詩以て其の事を記す、

燕山積雨泥塞道、大屋欹傾小屋倒、赭衣棘下無容色、倉卒移司避流潦、行行桎梏如貫魚、憐我龍鐘遲明早、我來二十有一月、若書下下幾二考、夢回恍憶入新衙、不知傳舍何時了、幸有痴兒了家事、九牛一毛亦云小、天門皇皇虎豹立、下土孤臣泣雲表、莫令赤子盡爲魚、早願當空日杲杲、

天祥既に宮籍監に移され、一室に置かる、頗る瀟洒たり、明牕と淨壁と、樹影横斜、清涼掬すへし、

塵滿南冠歲月深、覺移一室倚旃林、天憐元是青山客、分與牕根兩樹陰、

壁間顔自有龍蛇元是誰人小住家不似爲囚似爲客倚牕望斷暮天涯

曾過盧溝望塔光今朝塔影接盧舠道人心事眞方丈靜坐日長雲滿簾

兵馬司もと地の窄きに苦しむ、其の東大宅あり、之を買うて其の治所を廣む、舊廳事是れより空閑となる、七月十一日、囚人皆官籍監よりして悉く獄に歸る、天祥も亦た歸る、舊廳事の西に一室あり、天祥こゝに處かる、其の地高燥にして空凉、虛檐白を生し、蕭然として獨往、寂として來人なし、亦一の清淨の場なり、

秋聲滿南國一葉自飄蓬墻外千門迥庭皋四壁空誰家驢吼月隔巷犬嗥風燈暗人無寐沉沉夜正中

天祥此の室に在ること二旬日、もと天祥が囚せられたる獄戸は、既に葺せられ、繕はれたり、八月七日を以て、天祥此の室を辭して、復た再ひ故との獄戸に返るの已むを得さるに至れり、向きの臭腐濕蒸の諸惡氣と諸惡臭と、依然として舊の如し、仲尼は蠻貊に在りと雖とも何をか陋とせむと曰ふ、天祥亦其の挾む所のものを自ら回視するに、浩然として獨り存するものあり、耿乎として猶ほ照すものあり、古風一首を作くる、

人情感故物百年多離憂桑下住三宿應者猶遲留矧茲方丈室屏居二春秋夜眠與晝坐隤乎安楚囚日羅大雨水圍土俱爲舟此身委傳舍遷徙無定謀去之已旬月宮室重綢繆今夕果何夕復此搔白頭恍如流浪人一旦歸舊游故家不可復故國已成丘對此重回首汪然涕泗流人生如空花隨風任飄浮哲人貴知命樂天復何求

天祥俯仰天地の英靈に觸れ來れり、默識して心融す、八面玲瓏にして內外瑩徹、脫体現前、天祥本來の面目是れ這箇、宇宙即ち是れ天祥、天地萬物即ち是れ天祥、日月星晨より山川草木鳥獸魚蟲に至るまで、凡て是れ天祥方寸靈光の發用流行中に在り、天祥は今や不生不滅の人となれり、不老不死の身となれり、是れ仙か、仙にあらず、是れ佛か、佛にあらず、竟に「正氣歌」を作くる、

* * * * * * * * * *

題延眞羅道士玉淵

雙岩夾方流知有至妙蘊山石發清暉草木得餘潤泉源皆寶氣樵牧駭潛蹤仙翁獨危坐華池養水性神澤溫而栗骨峭老益勁苦機枕泓碧時有魚出聽麋瓊飯潺湲冲淡意無朕

聽羅道士琴二首

斷崖千仞碧下有寒泉落道人揮絲桐清風轉寥廓飄飄襟袂舉氷紈不禁薄紫烟護丹

鸞雙舞天外鶴。
吾聞泗濱磬暗含角與徵又聞天樂泉淨洗箏笛耳如何碧一泓乃此幷二美藍田滄海
意請問玉溪子。

東方有一士
萬金結遊俠千金買歌舞丹青映第宅從者塞衢路身爲他人役名聲落塵土他人一何
傷富貴還自苦東方有一士敗垣半風雨不識絲與竹飛雀滿庭戶一敗或不飾夜寥無
驚寤此事古來多難與俗人語。

第二十四　正氣の歌

予囚北庭坐一土室室廣八尺深可四尋單扉低小白間短牢汗下而幽暗當此夏
日諸氣萃然雨潦四集浮動床几時則爲水氣塗泥半朝蒸溫歷瀾時則爲土氣乍
晴暴熱風道四塞時則爲日氣鬱陰薪爨助長炎虐時則爲火氣倉廩寄頓陳陳逼
人時則爲米氣駢肩雜遝腥臊汗垢時則爲人氣或圊溷或毀屍或腐鼠惡氣雜出
時則爲穢氣疊是數氣當侵沴鮮不爲癘而予以孱弱俯仰其間于茲二年矣無恙
是殆有養致然然爾亦安知所養何哉孟子曰我善養吾浩然之氣彼氣有七吾氣
有一以一敵七吾何患焉況浩然者乃天地之正氣也作正氣歌一首。

天地有正氣雜然賦流形下則爲河嶽上則爲日星於人曰浩然沛乎塞蒼冥皇路當清
夷含和吐明庭時窮節乃見一一垂丹青在齊太史簡在晉董狐筆在秦張良椎在漢蘇
武節爲嚴將軍頭爲嵇侍中血爲張睢陽齒爲顏常山舌或爲遼東帽清操厲氷雪或爲
出師表鬼神泣壯烈或爲渡江楫慷慨吞胡羯或爲擊賊笏逆豎頭破裂是氣所磅礴凜
烈萬古存當其貫日月生死安足論地維賴以立天柱賴以尊三綱實係命道義爲之根
嗟予遘陽九隸也實不力楚囚纓其冠傳車送窮北鼎鑊甘如飴求之不可得陰房闃鬼
火春院閟天黑牛驥同一皂雞棲鳳凰食一朝蒙霧露分作溝中瘠如此再寒暑百沴自
辟易悲哉沮洳場爲我安樂國豈有他繆巧陰陽不能賊顧此耿耿在仰視浮雲白悠悠
我心憂蒼天曷有極哲人日已遠典刑在夙昔風簷展書讀古道照顏色。

天は覆ふなり、地は載するなり、日月は照し、星辰は運る、擊つものは雷霆なり、卷くものは風雲なり、雨露は霑はし、烟霧は鎖ぴく、聳ゆるものは山、流るゝものは水、草木は生長し離披し、鳥獸は飛行し奔馳す、春は花咲き鳥啼き、夏は雲の峰風薰り、秋は紅葉と蟲の聲と、冬は置く霜と白雪となり、鳶飛むて天に戻たり、魚淵に躍る、聖人は化し、賢者は教へ、英雄は叱咤し、豪傑は崛起す、區ふものは詩人なり、描くものは畫工なり、

商は鬻き農は耕す、嗚呼孰れか之をして然らしむるか、

堯は是を以て之を舜に傳へ、舜は是を以て之を禹に傳へ、成湯伊尹に傳へ、文武周公に傳へ、孔孟に傳ふ、釋迦は是を以て之を迦葉に傳へ、文殊維摩に傳へ、龍樹馬迷に傳へ、達磨は之を四七二三に傳へ、基督も之を傳へ、マハメットも之を傳へ、ソクラテスも之を傳へ、プラトーも之を傳ふ、嗚呼孰れか之をして傳へしめたるか、又孰れか爲めに之を傳へたるか、

然らしむるものなくして然り、傳へしむるものなくして傳ふ、然らしむるのなし、故に然る所以を知らず、傳へしむるものなし、故に傳ふる所以を知るなし、而かも堯舜は「惟精惟一、允執厥中」と曰ひ、中庸は「致中和而天地位矣、萬物育矣」と曰ひ、孔子は「吾道一以貫之」と曰ひ、孟子は「吾善養我浩然之氣」と曰ひ、老子は「赤子之心」と曰ひ、莊子は「逍遙游」と曰ひ、屈平は「壹氣孔神」と曰ひ、釋迦は華を拈し、迦葉は笑ひ、文殊は問ひ、維摩は默す、臨濟は喝し、德山は棒ず、基督の愛、マハメットの血、何を以て然るか、何が爲に傳へたるか、天祥は古往今來の聖賢哲人を推倒して、震發雷轟、其の然るもの其の傳はるものを、一言喝破して正氣と曰ふ、

天祥は天地の神機に觸れたり、宇宙の靈秘に感じたり、直覺して默識し、一口に吐出して、「天地有正氣」と叫ぶ、一篇正氣の歌直ちに是れ六經の粹を拔き、八萬四千法門の蘊を闡き、數文信條の精を鍾め、古今哲理の玄を鉤す、仁と曰ひ義と曰ひ、禮と曰ひ智と曰ひ、又信と曰ひ愛と曰ひ、道德と曰ひ、眞理と曰ふ、却て天祥の所謂正氣が簡にして明、直截にして、劃切なるに如かず、宋儒役々として大極無極を說き、漫に空理を談ず、程子前に在り、朱子後に在り、而かも終に天祥一正氣歌の、炳々赫々たるに如かず、岐々嶇々として起り、正々堂々として進み、公明正大を以て終る、一篇正氣の歌、即ち是れ宋學の精華なり、宋亡びて千古萬古、正氣は天祥と共に泯せず、亡せず、長へに天地と悠久を俱にす、

天祥は起首劈頭に、正氣の本體を述べて曰はく、

天地有正氣、雜然賦流形、

其宇宙に於ける正氣の作用を述べては、

下則爲河嶽、上則爲日星、

と曰ひ、其の人に於て賦與せらるゝ天賞を表しては、

於人曰浩然、沛乎塞蒼冥、

と曰ひ、而して其の人に於て賦するものを別つて二となし、其の平常事なきの時に

於ける平和の方面を述へては

皇路當清夷含和吐明庭

と曰ひ、其の危急有事の際に於ける、鼓奮の方面を述へては、

時窮節乃見一一垂青史

と曰ひ、以て之を史上に於ける、忠憤義烈の人に依て示し來る、大史の筆と曰ひ、董孤の筆と曰ひ、張良の椎と曰ひ、蘇武の節と曰ひ、或は嚴將軍の頭、或は嵇侍中の血、張睢陽の齒、顏常山の舌、管寧か遼東の帽、孔明か出師の表、祖逖か渡江の楫、秀實か擊賊の笏、皆是れ所謂「時窮節乃見一一垂青史」と云ふ者、主眼洵に此に在り、

天祥は更に正氣か發用流行の德を述へて曰はく、

是氣所磅礴凜冽萬古存當其貫日月生死安足論地維賴以立天柱賴以尊三綱實繫命道義爲之根

と、即ち是れ正氣其のものゝ注脚なり、其の言の堂々として、何そ其れ靈明なるや、一篇の骨骸、全く此の處に在りて存す、

其の末段に於て、

哲人日已遠典刑在夙昔風簷展書讀古道照顏色

と曰ふを以て、一篇を收結し畢るに至ては、翅に詩趣の洋々として溢るゝを覺ゆるのみならず、又一結千鈞萬鈞の力あるなり、

天祥は一の正氣を以て、天地を包み、宇宙を象ね、英靈を感ぜしめ、鬼神を泣かしめむとはするなり、天祥は正氣の凝團なり、天祥は即ち正氣、正氣即ち天祥、二致なし、天地も宇宙も、亦是れ正氣、既に是れ正氣、故に天地も宇宙も、天祥と其の体を同うす、天祥は天祥を包ね、宇宙を象ね、然らば天祥は翅に威武に屈せず、富貴に伏せざるのみならず、山岳前に崩れ、大淵前に頹るゝも、彼れ動かざるなり、變ぜざるなり、況むや水氣、土氣、日氣、火氣、米氣、人氣、穢氣の七者をや、七を以て一を攻むるも、一終に之を如何ともする能はず、是に至て天祥の所謂正氣は、平易にして卑近、造次にも用ゆへく、顚沛にも用ゆべし、其の平易にして深淵、卑近にして高遠なる所、是れ他の宋儒が理學の論、千言萬語を費やすに勝る所以なりとす、

正氣の本体が日星となり、山嶽となる所、今暫く之を措き、其の人心に於て、特に皎奮するの狀態に就て、一の觀察を試みむ、

之を大にして國家民人の存亡、宗廟社稷の危急、此の時に當りて此氣の發動する所、忠憤義烈、凜として犯すべからず、鼎鑊前に在り、刀鋸後に在ると雖とも、亦之を如何

ともするなきなり、此れ其の大なるもの、若し夫れ其の小なるものに就ては、一個人と外界の天然、即ち天祥の所謂七氣の如きもの、之に敵するに於ても、正氣は竟に動かず變ぜず、屈せず撓せず、巍然たり凜乎たり、翹に天祥の所謂七氣のみならず、卒然として我に加へ來るもの、天地限きりなきの變、豈に亦一二にして足らむや、其の彰明較著なるもの、即ち地震の如き、洪水の如き、火災の如き、海嘯の如き、天然力の變にして、卒然突如として斯人に加うるもの、其の幾許なるを知らず、而かも正氣固より以て之に敵すべきなり、其の他人事の變、盜難の如き、疾病の如き、戰亂の如き、是れ亦一々枚擧に遑あらず、其の天然の變たると、人事の變たるとを問はず、又天下の變とを問はず、正氣は毎に此等か爲めに屈せさるものなり、撓ませさるものたり、又動かす變せさるものたり、

天然力の變に就ては(一)シヽー島エトナ噴火山破裂のとき、山麓の兵營埋沒された る後、灰土を發掘して得たる番兵か銃劍正しく委勢を整へて直立しなから、埋沒し居るを發見したるか如き、彼れ火山爆裂のときも、其の職分を失はさるを見るに、是れ噴火爆裂の爲めに、正氣を失はさるものたるなり、(二)藤田東湖か地震に逢い、從容として老母を屋外に運ひ畢りて、不意に屋梁に擊たれて死したるか如きは、地震の爲めに正氣を失はさるものたり、(三)蒼龍廣錄載する所の

天正壬午春、平信長父子、與甲府主源勝頼有隙、大擧陷州城、佐々木義弼作敗軍將、竊脫在惠林寺、師匿之不出、轉逃北國、於是信長大怒、遣武夫數百人、驅山中僧衆、趕上山門、門下積薪、四面放火、士卒持戟環列、露刃林立、寶泉寺雪峰存、東光寺藍田青、長禪寺高山壽等及學徒一百餘人、皆整儀依位、在焰烟中坐、國師據座垂語曰、諸人即今向火焰裡、如何轉大法輪去、各著一轉而爲末後句、衆皆下語、師即唱曰、安禪不必須山水、滅却心頭火自凉、既而猛火著衣、恬然不動、與衆入火定而化、實天正十年四月三日也、

の如き、火力の爲めに正氣を屈せさるものたり、其の他洪水に、海嘯に克く此氣を以て之に抗し、決して亂れさるもの、亦往々之あらむ、今一々茲に之を贅せす、

人事の變に就ても、正氣を以て克く之に抗し、之に敵して屈せす折れさるもの、固より、古來多かるへし、人事の變に於ける、難は難なりと雖とも、未た天然力の抗し爭ふへからさるに如かさるなり、而かも既に人事の變に於て、眞正に其の正氣を把持するもの、其れ亦克く天然力の卒然加へ來るときに於ても、晏如として處し、裕如として決するあることを得へきなり、

天祥の如きは、人事の變と天下の變とに處し、又一種外界の天然力に抗して、克く其

の炳々たる正氣を汚さず、汗せさりしものと謂ふへし、而かも天祥か眞正に正氣を把持し得たるの點は主として天下の大變に處して、公明正大の節義を赫灼たらしめたるに在りて存するなり、天下の變、洵に是れ、天然力の變よりも抗し難き所あれはなり、何となれは、天然力は死を決し易し、天下の變は、利害と榮辱との爲めに迷ふなきを得されはなり、故に韓愈伯夷頌を作くりて曰はく、

士之特立獨行適於義而已不顧人之是非皆豪傑之士信道篤而自知明者也」一家の非之力行而不惑者寡矣至於一國一州非之力行而不惑者蓋天下一人而已矣若至於舉世非之力行而不惑者則千百年乃一人而已耳若伯夷者窮天地亘萬世而不顧者也昭乎日月不足爲明崒乎泰山不足爲高巍乎天地不足爲容也」當殷之亡周之興微子賢也抱祭器而去之武王周公聖也從天下之賢士與天下之諸侯而往攻之未嘗聞有非之者也彼伯夷叔齊者乃獨以爲不可殷既滅矣天下宗周彼二子乃獨恥食其粟餓死而不顧由是而言夫豈有求而爲哉信道篤而自知明也今世之所謂士者一凡人譽之則自以爲有餘一凡人沮之則自以爲不足彼獨非聖人而自是如此夫聖人乃萬世之標準也予故曰若伯夷者特立獨行窮天地亘萬世而不顧者也雖然微二子亂臣賊子接迹於後世矣

一家之を非とするも、力行して惑はさる者あり、一國一州之を非とするも、力行して惑はさるものあり、世を擧けて、天下を擧けて之を非とする、力行して惑はさるものは、眞に千百年乃ち一人のみ、天下の變に處するの難、其れ此の如きものあり、既に是れ難し、故に克く此の難に處して、昭乎として明に、崒乎として立ち、巍乎として持するものに至つては、此れ所謂正義の士にあらさるよりは、孰れか克く此くの如きを得むや、

天下は既に元なり、天地は既に元なり、而して獨り天祥は宋となす、翹に一家を擧けて元に事ふるのみならず、翹に一國一州を擧けて元に事ふるのみにあらず、世を擧けて元に事ふるなり、而して天祥は獨り元に事へさるなり、特立獨行窮天地亘萬世而不顧者、乃ち直に天祥是れ。

* * * * * * * * * * *

今夫れ天祥の所謂正氣なる者に就き、更に稍子細に觀察せば、太た其の宇宙觀人生觀の趣味多きを見るなり、

- ●天地之氣
  - 一氣＝正氣
    - 天然
      - 日星
      - 河嶽
    - 人＝浩然
      - 清時＝和
        - 大史簡
        - 董孤簞
        - 張良椎
        - 蘇武節
        - 嚴將軍頭
      - 窮時＝節
        - 嵇侍中血
        - 張睢陽齒
        - 顏常山舌
        - 遼東帽
        - 出師表
        - 渡江楫
        - 擊賊笏
  - 七氣
    - 水氣
    - 土氣
    - 日氣
    - 火氣
    - 米氣
    - 人氣
    - 糠氣

- ●正氣
  - 体＝凜列萬古存
  - 用
    - 天道
      - 貫日月
      - 地維立
      - 天柱尊
    - 人道
      - 生死安論
      - 三綱繫命
      - 道義爲根

天祥は天地に一の氣あることを認め、其の醇なるものを取りて之を正氣と名つけ、之を醇ならざるものに對せしめたり、故に其の所謂正氣なるものは、絶對の正氣にあらずして、相對の正氣なり、然れども其天地の氣は一方より見れは、パンセーズムの神に似たれども、一方より見れはユニテリアンの神にも似たり、又カーラヤル一派か祖述せる、エアン、ボールの所謂ソオールなるもの、カントのビュア、リーゾンも、ヘーゲルのシンキングも、王陽明の良知も、佛氏の磐若と曰い眞如と曰ふも、俱に絶對をは指す者にして、天祥か認むる所の天地の氣とは同一なり、今佛氏に就て之を比較せば、尤も其の區別の存する所を明にするを得べし、

所謂磐若と曰ふは、天祥の天地の氣と同しく、其の區別して菩提と煩惱となし、一乘と六塵となす所、以て天地の氣の一氣と七氣と正氣と不正氣との區別に比するを得へし、正氣と正氣ならざるものとの區別、是一のカテゴリ、此のカテゴリ以上は區別なく、此のカテゴリー以下は區別限りなし、然り而して佛氏は菩提と煩惱とを相對的のものとしなから、又「菩提即煩惱、煩惱即菩提」と說き、磐若の絕對に歸すれとも、天祥は之を認めず、却て「以一敵七、吾何患焉」と曰ひて正氣ならざるものを降伏せしむるの概を示す、此の所王陽明か「無善無惡心之本體」と曰ひなから、又特に良知良能を說くと其の揆を一にせず、天祥は思想家にあらず、故に其の宇宙觀人生觀、共に已上の一着を打破するに及ばずと雖とも、彼は之を筆舌の間に打破せざるまでにして、其の自得する所固より逕庭あるべきにあらず、其一を以て七に敵する所、却て其の勇猛を見るべきなり、天祥は竟に一の實行者たるなり、之を論理の上より見れば、相對的なりとすへきも、之を頓悟上より見れば、形は相對なりと雖とも、其の實は絕對なり、天祥か安身立命する立脚地は、天地の最正最大最高最潔の處便ち是れ、打破鳳凰關、着靴立水上、是れ天祥の安宅、天祥の廣居なり、區々たる文字の間、固より容易に、天祥其人の面目を摹索すべからざるなり、

顧此耿耿在仰觀浮雲白、

耿々たるものは何者、天祥は之を正氣と曰へり、而かも天祥は正氣を得て、正氣の何たるを知らず、知らざる天祥は、克く仰いで浮雲の白きを觀るなり、浮雲の白きは何が爲めにして白きか、天祥の眉目此の間に躍如たり、

今天祥か學術に於て言ふ所あるもの二三を擧けむ

◎凡道各有入處、凡學各有悟處、程子以敬、張子以禮、示人以從入也、而遊程張之門者、或得於靜坐、或得於主一、或得於去一矜字、悟之不必同也、凡入皆以悟、凡悟皆可入、

◎乾稱進德者三、所以進者無他、法天行而已矣、進者行之驗、地有遠行無有不至、不至焉者不行也、不行而望進、前輩所謂遊心千里之外、而本身却只在此、雖欲進焉得而進諸、

◎川之水、道之體也、山之泉、性之象也、善盡道者、以敬而操存之、則猶之川而不息焉、善盡性者、以敬而涵育之、則猶之泉而不雜焉、蓋有欲則息、惟敬爲能不息、有欲則雜、惟敬爲能不雜、

◎自唐儒以博愛謂仁、而仁之道遂爲小惠、至先儒以仁爲包四德、而學者始識仁旨、漢晉以來、有恕已恕人之說、而恕之弊遂爲姑息、至先儒以恕爲如心、而學者始明恕、聖

人浸遠道學無傳賴伊洛諸君子出而抉聖經千載之秘而後之學者遂得襲其遺以求進於道

◎觀書每誦一義善可以爲法即驗之於身曰吾嘗有是乎無則勉之每說一事惡可以爲監即揣之心曰吾嘗有是乎有則改之

◎仙人之心狹於成己高士之心薄於濟人且夫兼人己爲一致合體用爲一原吾儒之所以爲吾儒也重己而遺人知體而忘用異端之所以爲異端也高士非學吾儒者而能以濟人爲心噫高士不賢於仙人歟

天祥か學術に於て造詣する所の一斑亦以て推すに足る天祥蓋し程朱の學より得來て之に參するに佛老を以てし而して佛老を闡して異端となすもの其の言鑿々として大儒の口吻たるを失はす天祥這裏一の道學先生たる所

風簷展書讀古道照顏色

* * * * * * * * * *

先兩國初忌九月七日

北風吹黃花落木寒蕭颼哀哀我慈母王化炎海秋日月水東流音容隔悠悠小祥哭下邳太祥哭幽州今此復何夕荏苒二星周嗟哉不肖孤宗職曠不修昔母肉未寒委身墮寇讐仰藥早云遂庶從地下遊太阿落人手死生不自由南冠坐絕域大期落淹留白華下玄髮碧蘚生緇裘心口自相語形影旁無儔空庭鬼火閃天黑對牢愁魚軒在何處魂魄今安否兒女各北歸墳墓委南陬寒食雨凄凄孟飯誰與投荊棘纏蔓草狐兎緣荒丘長夜良寂寞與我同幽幽我心亦勞止我命實不猶昨夕夢堂上樂昔歡綢繆覺來尙恍惚血涕連衾稠晨興一辨香痛如螢在頭吾家白雲下萬里關山憂遙憐弟與妹几席羅庶羞既傷母在殯又念兄在囚兄囚不足念母亦爲母謀三聖去已遠穹垠莽洪流緬懷百世慮白骨空塡溝冥冥先大夫欝欝蒼松楸防山迄合塞瞑目復何求

重陽

世事漠々總不知南山秋意滿東籬黃花何故無顏色應爲元嘉以後詩

老來憂患易凄凉說到悲秋更斷腸世事不堪逢九九休言今日是重陽

除夜

乾坤空落落歲月去堂堂末路驚風雨窮邊飽雪霜命隨年欲盡身與世俱忘無復屠蘇夢桃盞夜未央

第二十五　衣帶中の贊

昔人云、蓋柱之性、至老愈堅、予亦云、金石之性、要終愈硬、性可改耶、天祥紀事錄中語

天祥燕獄に囚せられてより三たび新春を迎へたり、今は早や壬午の歳とはなりぬ、眞州に至りしは丙子上巳前一日なりにき、俯仰すれば既に六袞葛を經たり、今昔の情切なり、感極まつて天祥涙數行下る、詩以て其の心を寫す、鬼神知るあらば、亦爲めに泣くべし、

憶昔三年朔、歳在丙子、鄭朝登迎鑾、鎮夜宿清邊堂、于時至靈霧陽精黯、無芒胡羯犯彤宮、犬戎升御床、慘慘銅駝泣、威垂朱鳥翔、我欲疏河嶽、借助金與湯、吾道率曠野、繞樹空徬徨、慷慨撫鬢背、艱關出羊腸、扶日上天門、隨雲拜東皇、祖逖誓興晉、鄭畋義抉唐、人謀豈云及、天命不于常、泗水沉洛鼎、劉丘植汶篁、瑤宮可敦后、玉陛單于王、革命曠千古、被髮緜八荒、海流忽西注、天旋俄右方、嗟予俘爲馘、萬里勞梯航、秋風上甌脫、夜雪臥桁楊、南冠鄭大夫、北客蘇中郎、龍蛇共窟穴、蟻蝨連衣裳、周旋溲渤間、宛轉沮洳塲、漠漠蒼天黑、悠悠白日黃、風埃滿沙漠、歲月稔星霜、地下雙氣烈、獄中孤憤長、唯存葵藿心、不改鐵石腸、斷舌奮常山、抉齒厲睢陽、此志已溝壑、餘命終岩墻、夷吾不可作、仲連久云亡、王衍勸石勒、馮道朝德光、末俗正應靡、橫流已湯湯、餘子不足言、丈夫何可當、出門仰天笑、雲山浩蒼蒼、

正月二十日後、天祥病に臥し熱發し、右殿毅道の傍瘧を患ふ、二月四日、流膿迸裂し、平生の痛苦、未だ此の如きものあらず、天祥の苦悶と懊惱と、其れ如何ばかりなりしか、而かも天祥凜として持し、敢へて苦ひの色なし、

是の時、南人の北朝に仕ふる者、謝昌元、王積翁、程飛卿、留夢炎、等十人あり、相謀り奏請うて、天祥を以て黃冠の道士となし以て世を畢へしめむとせり、蓋し王積翁此の議を主とせるなり、夢炎私かに積翁に語りて曰く、文公贛州檄を移すの志と、鎭江身を脫するの心と、固より在り、忽ち妄りに作るあらば、我輩何を以て自ら解せむと、遂に果さず、

天祥獄中復五月二日の誕辰に逢へり、

憶昔閑居日、端午逢始生、升堂拜親壽、樞衣接賓榮、戲酒出郊去、江花相送迎、詩歌和盃軸、鏗戛金石聲、于時果何時、朝野方休明、人生足自樂、帝力無能名、譬如江海魚、與水俱忘情、詎知君父恩、天地同生成、旋頭忽墮地、氛霧迷三精、黃屋朔風捲、圍林殺氣平、四海靡所騁、三年老于行、賓僚牢落覆、妻子同飄零、無幾哭慈母、有項遭潰兵、東兵獻穹帳、囚

首送空囹痛甚衣冠烈耳於鼎鑊烹死生久已定寵辱安足驚不圖坐羅網四見槐雲青
朱顏日復少玄髮益以星往事直蕉鹿浮名一草螢牢愁寫玄語初度感騷經朝登蓬萊
門暮涉芙蓉城忽復臨故國搖搖我心旌想見家下人念我涕爲傾交朋說疇昔惆悵難
豚盟空花從何來局吾舞娉婷莫道無人歌時鳥不可聽達人貴知命俗士空勞形吾生
復安適柱頰觀蒼冥

其の五日天祥端午の節に遇ふ、

五月五日午熏風自南至試爲問大鈞舉杯三酹地田文當日生屈原當日死生爲薛城
君死作泪羅鬼高唐狐兎遊雍門發悲涕人命草頭露榮華風過爾唯有烈士心不隨水
俱逝至今荆楚人江上年年祭不知生者榮但知死者貴勿謂死可憎勿謂生可喜萬物
皆有盡不滅唯天理百年如一日一日或千歲秋風汾水辭春暮蘭亭記莫作留連悲高
歌舞魏翠

孟嘗君か生れたるは此の日なり、屈靈均か沒せしは此の日なり、一は薛城の君となり、一は泪羅の鬼となる、天祥獨り獄中に在り、孟嘗君たる能はず、屈靈均たる能はず、依然として病に臥す、

猛思身世事四十七年無鶴髮俄然白鷺飛久已殂二兒化成土六女掠爲奴只有南冠
在何坊是丈夫
北轍更寒暑南冠幾晦冥家山時入夢妻子亦關情惆悵心如矢崎嶇命復輕遭時命如
此薄分笑三生

疾病三連次形容落九分幾成白宰相誰識故將軍暗坐羞紅日閑眠懇白雲蒼蒼竟何
意未肯喪斯文

病は天祥をして拂亂せしむるに足らず、而かも天祥は竟に爲めに目を病めり、

近來煩惱障左目忽茫茫聽政心雖碎劉伶醉未忘問天天不應質日日何傷萬相由來
假收拾大乙光
向來嚴下電無故眩生花達磨面向壁盧仝一場沙燈前心欲碎鏡裏鬢空華何日看明
月沈沈斗柄斜

眼華を生して翳り、日月も爲めに光なし、何の日か青天を仰き、白日を看又、明月を望まむ、

燕の朝庭には、和禮霍孫相たるなり、天下平にして、武臣亦用なし、頻りに文儒を引き用いむとす、是に於て天祥を以て薦をなすものも亦多し、世祖開平より燕に還り、朝に上りて群臣に向うて曰ふ、南北宰相孰れか賢なると群臣皆曰ふ北人は耶律楚材

に如くはなく、南人は文天祥に如くはなしと是を以て世祖將さに天祥を起こして、之に付するに大任を以てせむとせり、八月王積翁謝昌元もとより天祥の爲めに憂ふる所あるもの、彼等因りて書を與て意を諭す、天祥復書して云はく、

諸公義同鮑叔、天祥事異管仲、管仲不死而功名顯於天下、天祥不死而盡棄其平生、遺臭於萬年、將焉用之、

と積翁其の屈すへからさるを知り、乃ち寢め、更に奏して天祥か宋狀元宰相となり、事ふる所に忠なり、若し釋して殺さゝるとならは、之を禮待せられむゝことを請ふ、是に於て世祖積翁に語り兵馬司に命して飲食を好與して、之を優待せしむ、天祥之を聞き、人をして積翁に語らしめて曰ふ、

吾義不食官飯數年矣、今一旦飯於官、吾且不食、

と積翁乃ち復言はす、天祥死して後、危言を以て積翁を憾むものあり、積翁曰はく天祥地下龍逢比干に從うて遊ふを得は足れりと、言ふもの遂に止む、

積翁既に天祥に却けられ、已むを得す累ねて銀物を以て天祥に餉くる、福王與芮亦燕に在り、天祥の屈せさるを聞き、嘆して曰はく、我か家此の人あるかと、亦餉るに銀百兩を以てし、積翁に屬して、轉して之を天祥に致さしむ、天祥既に久しく獄中に在り、無聊日に詩文を以て自ら遣る、輸墨燕市に滿つ、時あつて吏士の爲に前史忠義傳を講す、皆傾聽感動せさるはなし、兵馬司の長李指揮、魏千戸之に奉事すること尤も至る、

朝庭に於ては、天祥を如何にせむとの問題、常に提議せる、參政麥述丁甞つて省を江西に開けり、當時親しく天祥か師を出して震動せしめたるの狀を目擊せしもの、每に天祥を殺すの便を言ひ、天祥罪人を以て千戸の所に在るものなりと曰ふ因て其の棋奕筆墨書冊を悉く收めしめたり、

初閩の僧妙聽と云ふものあり、琴堂と號す、星を談するを以て見ゆ、是の春進み言ふ、十一月土星帝座を犯さむ、疑らくは變あらんと、群臣皆な瀛國公(宋の端宗)の族燕京に在るの不利なるを言へりしに、尋て中山府狂人薛寶住と云ふもの、數千人を聚め、聲言すらく、是れ眞の宋の幼主なり、來りて文丞相を取らむと、又檄に書するものあり、匿名にして投す、曰はく、兩衙の軍、儘事を辨するに足れり、丞相以て慮なかるへしと、又書して曰ふ、某日事を擧けむと欲す、先つ城上の草子を焚き、城外火を擧けて應するをなさむと、群臣咸言ふ、丞相と云ふは、是れ天祥を指すなりと、又瀛國公の族燕に在るの不利なるを極言す、時に盜あり新に左丞相阿合馬を殺す、物議洶然たり、京

師戒嚴す朝廷遂に命して、城葦を撤せしめ、又瀛國公及宋の宗室を驅つて、開平に住せしめたり、是に於て衆疑の中心は天祥の身となれり、

十二月初七日司天臺奏す、三臺折けたりと、初八日世祖天祥を召して殿中に入らしむ、天祥既に至る、長揖して拜せす、左右之を强ゐて拜跪しめむとし、甚しきは金撾を以て其の膝を摘し傷つくるあるに至る、天祥堅く立て爲めに動かす、極言して曰ふ、宋に不道の君となく、弔すへきの民もなし、不幸にして母老へて子弱に、權臣國を誤り、用舍宜を失す、北朝其の叛將と叛臣とを用ゐて、其の國都に入り、其の宋社を毀てり、天祥は宋に再造の時に相たりしなり、宋亡へり天祥當さに速かに死すへきなり、當さに久しく生くへからすと、世祖之を論さしめて曰く、汝此に在ること久し、如し能く心を改め慮を易く、亡宋に事うるものを以て、我に事へは當さに汝を以て中書宰相たらしめむと、天祥對へて曰く、天祥宋朝三帝の厚恩を受けて、狀元宰相となれり、宋亡へり惟死すへし、生くへからす願ふ所は一死足れりと、世祖又論さしめて曰く、汝宰相たらすむは、則ち樞密たらしめむと、天祥對へて曰く、一死の外なすへきものなしと、遂に之を麾かし退かしむ、是の夜天祥回りて魏千戸の所に宿す、

* * * * * * * * *

精銅之金、百鍊彌勁、朝宗之水、萬折而必東、　景炎戊寅六月獎論詔中語

* * * * * * * * *

初九日宰執奏すらく、文天祥既に歸附するを願はす、其の請の如く之に死を賜ふに如かすと、麥逃丁彼れもとより天祥を殺すを賛せしもの、是に於て其の決を力め賛し、遂に其の奏を可す、

* * * * * * * *

天祥將さに獄を出てむとす、即ち絕筆自贊を爲くりて之を衣帶の間に繫く、其の詞に曰く、

孔曰成仁、孟云取義、惟其義盡、所以仁至、讀聖賢書、所學何事、而今而後、庶幾無愧、

と、宣使は金鼓を以て迎えて市に詣らしむ、天祥市を過く、意氣揚々として自若たり、觀者堵の如し、既に柴市に至り刑に臨む、天祥從容として吏に謂て曰く、吾事畢矣と、左右に問ふ孰れか南北たると、乃ち南向再拜して曰く、臣國に報して此に至ると、遂に刑を受けて死す、天祥齡方さに四十有七、實に宋亡びたるより三年、元の至元十九年壬午十二月九日なり、

* * * * * * * *

是の日大風沙を揚け、日色光なく、晝晦うして咫尺人を辨せず、都門晝閉さし、甲卒城に登はり、街上對隣相往來するを得す、行人偶語するを得す、天祥の旣に刑所に赴むくや、俄かに使わり、其の刑を止めしむ、使至れば則ち天祥は已に死せり、見るもの聞くもの皆流涕せさるはなし、南人の燕に留るもの、悲歌慷慨、相應和し、更に酒を置て、天祥を酹す、明日夫人歐陽氏東宮より令旨を得て、屍を收む面生くるか如し、江南の十義士あり、柩を奉して都城の小南門外二里の道傍に葬り、他日骨を收めて歸るに便せしむ、

天祥旣に死す、兵馬司を籍して、其の爲くる所の詩文を得たり、之を世祖に上る、觀者咸な嗚咽感慟せさるなし、其の絲履を得るありてすら、之を實藏せさるなし、

* * * * * * * *

於乎丞相之大忠大節獨立萬古直與日月爭光天地悠久比之夷齊心則不殊而所爲反有難者昌黎韓子所謂特立獨行窮天地亘萬古而不顧者也其相從興義之士皆甘心就死不肯屈辱殺之殆盡無一人肯降丞相忠義至誠感動固結於人心牢不可解有如此者使人皆爾則宋豈有亡理 吉水胡廣識

* * * * * * * *

明けて至元二十年癸未の歲、天祥の柩歸つて故里に至る、時に弟璧は臨江總管兼府尹に任す、悉く喪祭を辨す、男陞祗みて几筵を奉す、舊年璧家人を遣はして廣に至り、母曾夫人の靈柩を遷し奉せしむ、是の日適天祥の柩を載するの舟と、江滸に逢へり、蓋し亦奇遇なり、

二十一年甲申の歲、天祥を富田の東南五里、鷲湖大坑の原に葬る、男陞墓に廬すること三年、墓天祥の桑梓を去る僅に三里

春雨秋霜奉嘗謁祀俎豆席獻罍酹茀阜亭潮湯之英風凜凜有時鬱然萃於此乎南劍空坑之寸丹耿耿有時勃然見於此乎燕京柴市之正氣堂堂有時浩然來於此乎於戲先生之忠義並泰嵩塞宇宙精神雖無所不之而體魄所棲以安者實在於茲 羅元泰墓田記

夫人歐湯氏は天祥死してより、二女柳小娘環小娘と道冠道裝を服し、日に道經を誦して、大同路豐州栖眞觀に居れり、大德二年戊戌の冬、年老えて寒凍に禁せさるを以て、請うて南の方都城に至るを得たり、男陞往き之を迎養す、季節に遇ふ每に、夫人輙ち舊家の典故を嗟嘆す、亦た爲めに南の食品を辨し、隣媼を邀へて伴坐せしむ、諸士大夫皆な謁拜す、大德七年癸卯臘、寧州に至る、時に從子隆子寧州判官に任す、明年故

里に歸り、明年正月元夕、道體を酔し、二月八日佛供を酔し、此の心願を畢る、即死瞑目せむと、二月望痰疾を得、越えて四日、家人諸婦疾に侍る、夫人亹々として平昔の事を語ること常時の如く、浣婢に問うて、衣上の舊香囊を索む、浣婢其の損汚甚しきを見て已に之を棄てたり、急に命あるに及ひて、之を拾ひ至る、夫人特に諸人に示して曰く、此の伴吾未た曾て須臾も離れさるなり、落齒の時之を父母に得たり、祭文云く、烈女不更二人、忠臣不事二主、天上地下、惟吾與汝、之を丞相に得たり、吾死せば必之を吾心前に懸けよ、將に以て吾父母と吾夫とを地下に見て愧なからむとす、頃刻にして諸人に命して退きて、少休を俟たしむ、諸人窓外より候へは、夫人枕に伏するの痰響を聞く、就て之を視れは、則ち氣已に絶す、實に大德九年乙巳歳二月十九日なり、富田の南五里洞源に葬むる、

文天祥終

明治三十年七月二十日印刷
明治三十年七月二十五日發行
明治三十年九月二十七日再版發行

定價金三拾五錢

編纂兼發行人　東京市神田區南甲賀町八番地　香川悅次
印刷人　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　熊田宜遜
印刷所　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　熊田活版所
東京市神田區南甲賀町八番地

版權所有

發行所　政教社
賣捌所　東京市神田區表神保町六番地　東京堂

エト2J-65

CL.
NO. 11337

289.2
B97ka
Ⓜ

007578-000-7

289. 2--B97kb

文天祥

国府　犀東／著

M30

ACL-0031